

2025.11.27 (木)  
第21回例会  
(通算3830回)

会長 荒井 剛  
副会長 池田 一己  
幹事 横田 英喜  
編集責任者 クラブ会報・雑誌・公共イメージ委員会

例会日 毎週木曜日 12:30 ~ 13:30 夜間例会 18:00  
例会場 鈴鹿センチュリーキャッスルホテル  
事務局 鈴鹿市錦町 5-3 三ツ輪ビル 2F  
TEL 0154-24-0860 FAX 0154-24-0411

2025-2026 年度  
国際ロータリーテーマ

『よいことのために手を取りあおう』  
UNITE FOR GOOD

2025-2026 年度  
R1会長 フランチエスコ・アレッソ  
第2500 地区ガバナー  
佐渡 正幸 (鈴鹿北 RC)

本日のプログラム 講師例会「鈴鹿元町てらこや活動の現況と意義」(プログラム委員会)

次週例会 「年次総会」(理事会)

■ロータリーソング：それでこそロータリー ■ソングリーダー：佐々木俊和君

■会員数 106名

■ビジター

■ゲスト 北海道教育大学鈴鹿校教授・小林淳一様。同 ゼミ生 池田和月様・田名部真心様

### 会長の時間 池田 一己副会長



皆さん、こんにちは。本日は荒井会長が欠席のため私が会長挨拶を代行させていただきます。お食事中の方はそのままお取りください。

極めて緊張しております。左の席が空席になっていることや、鐘を目の前に置かれた時のロータリーの重みというものを実感するんだと感じました。

今日、荒井会長はサウジアラビアに行っております。かなり前からこの日程は決まっていたのですが、「会長がいないときは、確かに会長が原稿を書いたものを副会長が代読だよね」と私が言ったのですが、荒井会長は「いや、確かに副会長が自分でだよ」と二人で喧々諤々やっていたのですが、「昨日まで覚えていたら会長挨拶の原稿を送るわ」と言っていたのですが、いまだに来ていません。このまま私が挨拶させていただくことになりました。

今日、会長の代わりにお話をさせていただくので、荒井会長の会長方針・テーマについてお話をさせていただければと思います。

最初、荒井会長、横田幹事と私の三人で集まった時から、「笑顔というキーワードを入れたい」と仰っていました。会長の方針には笑顔と誇りと挑戦というキーワードがあります。特に笑顔に関しては、入って、

嬉しいから笑うとか幸せだから笑顔というのがあるけれども、どちらかというと自分から笑顔をつくることで幸せになったり、喜びが出たり、するのではないかと言われていました。

これは、その「笑顔」をもってロータリークラブの温かい雰囲気を醸し出して行きたいと考えられて最初に笑顔を掲げられました。

もうひとつの「誇り」に関しては、ふたつのテーマがあります。ロータリアンとしての矜持、自分の誇りを持つことがひとつ。もうひとつは、本日は小林教授をはじめ皆さんに話していただきます地域貢献です。地域に対しての関わりに誇りを持つということで、ふたつの意味を持っての荒井会長のテーマとなっておりました。

本日の小林教授とゼミ生のお二方によります「てらこや」でのこと。さっきは横田幹事の息子さんが昨日まで「てらこや」に行っていたことが発覚して、ゼミ生のふたりも横田幹事の息子さんの名前を覚えていて、いい経験をされているお子さん方の姿が思い浮かぶところであります。お三方のご講演をとても楽しみにしておりますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

以上で不慣れですけれども、会長代行挨拶とさせていただきます。

本日もどうぞよろしくお願ひいたします。

### 幹事報告 横田 英喜幹事

先ほどのお話を、うちの子が土曜日と水曜日に『て

らこや』というのがありますとして参加しています。米町の大成寺の下の旧明照幼稚園を利用して、てらこやの活動をやって地域の奨学生を迎えて教育大学の学生さんが見てくださる取り組みで、うちの子どもは地域密着で生きていくので、まさか、ここで会えるとは思っていなかったのです。逆に変なことをしていないかと緊張しながらドキッとした気持ちでした。

幹事報告をさせていただきます。年次総会の話をしたいと思います。例年は、予算の発表と次年度理事者の発表があります。例年以外の話として、今年4月に行われた規定審議会で採択を受けて、標準ロータリー定款が変更になることを10月の例会の幹事報告でさせていただきました。それを受けた釧路ロータリークラブの定款とクラブ細則について年次総会で改めて説明して、採択をいただきたいと思っております。

その変更点については10月にメールで皆さんに流させていただきましたので、再度ご確認をいただきたいと思います。概要としては、ロータリークラブ定款では国際ロータリー標準定款に則って各クラブの定款も変更しなければいけません。規定審議会の変更点を釧路クラブの定款にも反映させています。

具体的には、ロータリーの用語が変わっています。C L L S、何を言っているか分かりますか。そうですよね。クラブ・リーダー・ラーニング・セミナー、昔でいくと地区協議会とか地区研修協議会がC L L Sに変わったのでその用語の変更点が主な変更になると思います。これが定款の変更部分です。

もうひとつ、クラブ細則については、年次総会は12月第一週に行なうと細則ではなっているのですが、例年、釧路クラブは台北の周年事業に行って、日程がぶつかってしまう傾向がありましたので、第一週から前後一週間の間で年次総会を開くことができると変更をしております。

皆さん、もう一度ご確認をいただきたいと思います。  
以上、幹事報告とさせていただきます。

#### ■本日のプログラム■

講師例会「釧路元町てらこや活動の現況と意義」

#### プログラム委員会 藤井 敬亮委員長



こんにちは。藤井です。本日は異業種・他業種とのコラボレーションによる地域奉仕の可能性の一例として、私の行っている「釧路元町てらこや」の活動を教育大学の小林淳一教授とゼミ生から発表していただきたいと思います。

小林先生は道東地域の教員養成、学校教育に携わっておりまして、釧路公立大学非常勤講師、根室市教育

委員会外部有識者としての役割をお持ちの幅広く活躍されている先生です。それでは、よろしくお願ひいたします。

#### 『釧路元町てらこや活動の現況と意義』

北海道教育大学釧路校 小林 淳一様



今日はお招きいただきありがとうございました。北海道教育大学釧路校の小林淳一と申します。本日はどうぞよろしくお願ひいたします。

今日は、話題提供ということで既にお話も出ている私どもで藤井住職の所で活動させていただいている『釧路元町てらこや』の実践についてお話しします。また、実際に参加している大学生が今34名いるのですけれども、予定がつけられた2名に来てもらいましたので、合わせて3人で報告させていただきたいと思います。よろしくお願ひいたします。

演題は、釧路元町てらこや活動の現況と意義になります。本日の話題について5つのステップを準備させていただきました。

ひとつ目は、てらこやの概観についてです。ふたつ目は、その活動内容。三つ目は、そこで得られている成果と今後の展望。四つ目は、現状の課題。そして最後は、2名から学生から生の声を聞いていただければと思っております。

創設の経緯は少し長くなります。平成31年度、私がちょうど釧路に来た時、明照幼稚園の閉園に伴い園舎を活用した交流と学びの場である釧路元町てらこやという構想が立ち上がり、始まったと聞いております。その後、5月になって、住職の藤井様より北海道教育大学釧路校の学生に向けた参加の提案、それから意見交換をさせていただきました。

これを見て、いろいろな研究室で「やりたい」という声はあったのですけれども、たまたま私の所でご縁をいただき、私の研究室は地域教材開発研究室といいますが、このラボで参加を開始するに至りました。

私たちのラボについての簡単な解説は3点になります。基本的には初等教員養成ですので、主に小学校の先生になりたい学生が、ただ勉強するだけではなく教師の卵という立場から、特に子ども支援という観点で地域や社会に貢献できることを考えようというのをひとつ目の柱にしております。

ふたつ目は、学校教育学をやって行くうえで非常に大きなテーマになるのですけれども、先生の力ではなく学校の権威の力で子どもを抑圧的に指導するというケースがあります。これを制度的権威と言ったりします。例えば、「チャイムが鳴ったから席に着きなさい」。

先生の力量ではなくてチャイムを言い訳に座ることを強いていく。「ここ、テストに出すからちゃんと勉強しなさい」。それがいかに価値のあるものであるかを伝えきれないでテストのために勉強しなさいとか。「これができないと卒業させないよ」。卒業という制度を使って無理やり覚えさせる。

それ自体も間違えたこととは言い切れないのですが、子どもの心にしっかり府に落とさせるためには、楽しく、そして先生自身に魅力がないといけない。だから、大学生時代の教育実習というのが非常に大事ではあるのですけれど、私としては学校の外で、学生が自分の力で子どもたちと一緒に関わり、魅力を伝えられるような人間になってほしいと常日ごろから思っています。

ですから、てらこやで学生が子どもと接していた時に、子どもは飽きたら帰ってしまいます。言うことは聞いてくれません。そういう所で直接的にぶつかりながら成長してもらいたいというのがふたつ目のラボの特徴です。

三つ目は教材開発です。「〇〇があったらしいのに」とか「新型のパソコンがあればこういうことができるのに」ではなくて、それこそドングリが1個あったって十分楽しめるわけです。クローバーがひとつあるだけだって、いろいろな活動や理科ができるわけです。そのような先生になってほしいと願いながら学生指導をしています。

そうすると、てらこやのような活動をすると出てくるのが「やりがい搾取」なのです。学生を無料の労働力だと思って、「これも社会のためだよ」とか「これも勉強だよ」と言って、学生を何の意味があるのか分からぬに無理やり働かせる。こういうことは、できればしたくない。同じように学生の立場からしても、「ガク・チカ」などと学生が言ったりするのですが、就職活動の時に学生に「あなたは大学生の時に何に力を入れたのですか」と言われると、理由を付けるために無理やりボランティアをしたりする。それも本意ではないのに、ボランティアを自分の武器にしようとして行ったりする。

そういうことをやるのではなくて、本当に大学生が子どもと楽しみたい。で、自分たちが学んだ知識が本当に子どもと一緒にやって行けるのかを実践したい。そういう場を探していたところで、単純に、てらこやのラボのやり方と藤井さんの思いがとても近かったので協働して開設することになりました。

スケジュールは、毎週土曜日の12時30分から15時までを基本的な活動時間にしております。いま、水曜日と土曜日の午前中の話もあったのですが、一部を口述しますと、藤井様と調整して準備を始めているてらこや活動ですが、学生のほうの主体性から「もっと自分たちで活動の幅を広げたい」ということで水曜日

の午後と土曜日の午前中も弁当を持って大学生たちが参加しております。

これを「まなびや」と名前を付けているのですが、児童生徒はこの差が分かりませんので、「週2回、いつ行っても大学生が遊んで勉強を教えてくれるよ」という空間を作っております。

初めのころは、本当にワチャワチャやっていただけなのですが、今は「2時45分になったら、みんなで掃除をしようね」と幼稚園を片付けて、みんなで反省会・ミーティングをして3時30分を目途にみんなで帰ろう、とやっております。

構成員です。ざっくり言いますと、明照幼稚園ならびに近隣在住の皆さまがいろいろ支援してくださり、そこにラボの研究員・大学の私と研究生が入り、最近になってありがたいことですが、小学生時代にてらこやで遊んでもらった子が今は主に幣舞中学校に進学していて、これがてらこやの応援団ということで、中学生が幼稚園児とか小学校低学年の子と一緒に遊んだり、教えたりというサイクルができ始めております。中学生が毎週10名程度来ていますので、これくらいの中学生、大学生、大人がみんなで支えている活動になります。

児童生徒と大学生がどのくらい明照幼稚園に来ているのか、今年4月からの参加者数を簡単なグラフにしてみました。毎週やっているので、4月では4週、5月も4週ですから1週ごとにどのくらい来ているのか。4月では毎週平均36人くらいの児童生徒、11月では毎週30人の児童生徒が来ていて、それにひも付いて学生がこれくらい来ています。幼稚園の跡なので広大な幼稚園ではありませんので、子ども大学生だけで平均すると40人近くが集まっているので、なかなか大きい活動になってきているかなとは思っております。

一目瞭然なのですが、夏休みになると大学生も道外の人が多いので帰ることが増えたり、子どもは子どもで遊ぶ機会が増えたりするので参加者が少し減ります。9月も大学生が思いっきり減っているのは教育実習が入って來るので必然、なかなか行けなくなっているのでこのような形になっています。

大学生も子どもも多い時は、本当にワチャワチャで遊びます。大学生が少ない時は1人の学生が数名の子どもを抱えながら、みんなでゲームを考える活動を繰り返しております。

どうしても心配なのは、保護者へのアプローチです。もちろん、幼稚園自体はすごくいいもののなのですが、見たことない、聞いたことない大学生が集まって大丈夫なの、という心配は当然あると思います。ですから、私どもとしては「てらこやカード」で、保護者に緊急連絡先を聞いたうえで掲載して、何かあったらすぐに対応できるように配慮をとっています。そし

て、「学級通信」ではありませんが、毎月「まなびやてらこや便り」で、今月はこういうことをしました。来月はこういうことをする予定です。というのを作っています。11月はこのように紙媒体で作って、来た子たちに配って「親御さんに見せてね」とやっております。小さくて見にくいのですが、予算のない活動ですので紙代やインク代は毎年、赤い羽根共同募金が3万円を寄付してくれていますので、そこから捻出しております。保護者の中には、ラインとかインスタグラムを使う方が多いので、その中で活動の紹介や緊急連絡、ちょっと前には「地震があったので今日はやめましょう」「大雨なのでやめましょう」などの連絡を事前に飛ばしています。

主な活動内容です。ひとつ目は、子どもがやりたいことを学生が全力でかなえる、です。例えば、「紙芝居を見たい」が出てきたら、紙芝居を大学生がやってあげます。「ドッヂボールをやりたい」という時には大学生が審判をやってあげたり、「相撲をやりたい」には力の強い大学生が相撲相手になってあげたり。中だけではなく外でも、「バスケットを始めたので教えて」と言わいたら、バスケットの指導をしてあげたりします。寒くなって「ソリ滑りをしたい」と言わいたら、危なくないように後ろに座って一緒に滑ってあげたり。女の子の中で「カマクラに入りたい」と言わいたら、学生がみんなで大きいカマクラを作つてあげたり。このように子どもが何かをやりたいと言ったことに、その場で大学生が即時的に考えて実現してあげる活動をしております。

学生も、ただやっているだけではなくて、研究活動を子どもに依頼して、子どもと一緒に研究推進をしたりしています。

これは、私の担当している授業で西表島研修です。台湾のすぐ近くの西表島まで行って、いろいろな自然文化を体験する授業があります。そこにある南国の「アダンの木」とか「タコの木」とか、いわゆる海の砂で育つヤシのような木をたくさん持ってきて釧路の海の砂で育つか実験してみようと、ここで挑戦し、子どもたちと弁天が浜に行って砂を取ってもらったりも一緒にやってもらったりしています。

これは今年から始めている企画です。シロツメクサとよく似ている紫色のムラサキツメクサがあります。これを交配していくとピンクになっていきます。同じように、シロツメクサは例えば排気ガスなどのストレスを受けると白個体がピンクになることがあります。ピンクのシロツメクサをたくさん集めてくるのと同時に、四つ葉は摘んでしまうと押し花などにしておしまいですが、株で採ってくると四つ葉もかなり遺伝率が高いので、ピンクのシロツメクサと四つ葉のシロツメクサを群生させて交配させて置いておくとピンクの四つ葉のクローバーができます。これは遺伝子をい

じっているわけではなく自然交配で生まれるのです。こういうのも遊びとしては楽しいです。やはり、きれいでかわいいので、こういうのと一緒に作ろうと花壇の一部を借りてみんなで作っています。

私が個人的に、駄洒落ですけれど「クシローバー」と名前を付けて、そのうち、この辺の名物にしようかと考えているところです。

いま、大学生で頑張っているのが釧路の特産の昆布を生かして、みんなで遊びながら美味しく食べられるものを作ろうと開発しています。昆布の粉を練りこんで昆布うどんをみんなで打つてみよう挑戦しています。てらこやに来ている大学生も一緒に生地を踏むところから始めて、伸ばして、ゆでて、みんなで食べてみようか、と挑戦するのに子どもにも試食係、うどん打ち係などで入ってもらっています。

もちろん、唐突にやりたいことをみんなでやるものもあります。左の写真は落ち葉がいっぱい集まって、近隣の人がイモをくれたので焼きイモをしようと。後ろには藤井住職がおりますけど、「火事だけは出さないように」と学生と子どもが一緒になってやっています。これは焼きイモだけではなくて、例えば、東南アジアに行くとバナナをバナナの皮にくるんで置き火で焼いて主食にするのですが、「それをやってみよう。釧路だったらどうする」と。「フキがたくさんあるので、バナナの代わりにフキを濡らして蒸し焼きにしたら美味しいだろうか」と、実験的な遊びもしています。

右の写真は、西表島研修とか、屈斜路湖のキャンプ実習などで学生が釣りを覚えて、「釣りは楽しいよ」と言ったら、子どもたちが「やりたい」と言うので、近くの海に連れて行って、まさに昭和ですけれどもそのような活動、安全に気を付けながらやっています。定期的な持ち込み企画で、これは大学の3年生が夏に持ち込んだのです。「お寺でお泊りをしたい」と言うので、「お泊り会を開こう」と。参加する保護者と子どもと一緒にお寺の中で、寝袋で寝る企画を行ってみました。

この前の秋は、新しくゼミに入った一年生が、一年生企画で「秋のお楽しみ会をやりたい」と言うので、それをやっています。最近で面白いのは、卒業した中学生とか小学校の高学年が「自分たちにも企画をさせて」と言うので、中学生企画とか小学生企画を大学生と一緒にやっています。これは中学3年生が「子どもと大学生のためにハロウィンをやりたい」とゴミ袋を使ってオバケに化けて、みんなで遊んでいるところです。「みんなで知恵を出し合いながら楽しいことを考えよう」というのを定期的にやっています。

左は、藤井様が防災食としての「アルファ米」と「ワカメご飯の素」を寄付してくれましたので、みんなで何を美味しく食べられるかを考えました。「カレーを作つてアルファ米を食べよう」「ワカメご飯によく合

う味噌汁を作ってみよう」と火を使ってみんなでやっているところです。

右は、てらこやミーティングです。時には入りきれなくらいの子どもが残るので、大学生、子ども、それから私や藤井様も大人もみんなで、「こんなこと、あつたね」「上から落ちたことあったね」などと話しながら、次回に向けて何ができるかを考えたりしています。実際に大学生に届いている影響というわけではないですが、卒業生の推移では、第1期生が令和2年に卒業し、令和7年に次の卒業予定になります。50人弱の卒業生のうち40人程度が教員になって社会に羽ばたいております。中には大学院進学、公務員、民間企業を目指す人もいますが、てらこやを過ごした学生は釧路を含め地元に帰り、小学校の先生をやっております。てらこやにいると、教員採用試験で言われる児童理解力、実践的指導力、これは週2回定期的にやっているので、ものすごく付いていると私も自覚しています。どのくらいか、その一例です。全国の国立大学の先生になろうとしている教員養成系大学の全国統計の最新が令和5年度ですが、国立教員養成系大学の現役合格率が47.3%ですが、てらこやの学生は83.7%、非常に高くて累計でも40%近く全国平均よりも高いです。

学生がいる中で学生を卑下するわけにはいきませんが、釧路校は教員養成系大学の中では偏差値でいうと下のほうにあります。その中で突出して高い数字を残しているのは実践的指導力とか子ども理解力が高いのかなという実感があります。

てらこやを発足した時は3年生から始まったのですが、入学した時からてらこやがあった学生に限定すれば、31名のうち31名が現役合格をしております。100%がどこかの公立学校の教員になっているというのは、少ないサンプルだけではありますが、非常に高い成果になっていると思っております。

実際にどのくらいが先生になっているかというと、北海道教育大学全体が75%で、小学校採用者数では全国3位になります。北海道教育大学は人数が少ないので、数だけで3位なので比率でいえば最高段階です。釧路校はその中でも特に高く80%が教員になっております。これは北海道・東北のすべての大学で最も高い数字になっております。てらこや参加者では93.6%ということで、それよりも更に高い数字で将来先生になっています。

これは面白いのですが、1年生からの参加者に限定すると、逆に落ちるのです。これは何かというと、教員採用試験が100%なのに先生になるのが87.1%というのは大学院に行ったり、海外に行ってしまう学生が多いのです。今は制度的に、教員採用試験に合格した後に2年間待ってもらえる制度がありますので、4年生で合格した後、更に児童理解力などを深めたいと大

学院に行って2年間研究した後で、4年生の合格実績をもって教壇に立つ学生が増えてきました。そういう意味で、現役での採用率が減っているおかしな現象が起り始めています。

そうなった時によくあるケースとして、進学校の特進コースみたいにエリートの上澄みだけをてらこやに送り込んでいるのではないか、という批判はよくあるのです。そうではなくて、釧路校の研究室の所属学生は1学年あたり3.7名という規定がありますので、だいたいどのゼミも14名前後の学生を抱えて指導しております。ただ、私たちのラボは、34名と非常に多い数を抱えています。これは、もちろん優秀な学生はたくさんおりますが、どこの研究室にも入れなかつた学生が出てきます。人気のある研究室は数が絞られますし、選抜試験があります。落ちた学生は再配分されていきますが、うちは落ちた学生の底ざらいという言い方は何ですけれども、「来たい学生は全部来ていいよ」と預かっているので釧路校でも一番ゼミ生の多い研究室になっています。それでも「100%が出ている」というのは、本当は、私は私の指導力だと自慢したいのですけれども、てらこやがなかつたらできることなので、そういう意味で地域貢献しながら学生のキャリア形成に貢献しているところがあります。

やっていての小・中学生の意識変化についてです。中学生が参加するようになり、その中で小学生・中学生も自分たちの企画をするようになり、大学生が遠い目標から現実的な目標になってきたというところがあります。相談する時には必ず小学生も入るようになりました。大学生と小学生が同じ目線で同じような活動をしているのが最近のてらこやになります。

今後の課題です。北海道教育大学がこんど「未来の教員枠」を増やしていくです。地元の先生をたくさん育てましょう、というものです。なので、てらこや卒業生が釧路校から釧路市の教員になってくれるといいな、というのを10年スパンで考えております。

ふたつ目は、教育大生と教員の私と藤井様とでやっているので、お寺の視点と教育学的な考え方でのみ運営していますいろいろな立場の人々に来ていただいたら、ここはどう思うのかがすごく興味のあるところです。三つ目です。持続可能な運営に向けた資金調達。お金の話はあれなんですが、現在は大成寺のご厚意で場所を貸していただき、光熱費や水道代まで出している。残りは大学と学生の持ち出し、赤い羽根の基金で何とか貯っております。大学生もお金がない中で月に500円程度、年間で6000円程度を研究室費として出していく、その中から教材費とかうどんの粉とかを買っているので、持続可能かというと考えなければいけません。発展させていくうえで、ここが今後の課題になっていると私は思っています。

続いて、現役学生の生の声ということで、聞いてください。よろしくお願ひします。

### 大学生 池田様の発表



ここからは現役学生の声ということで、僕ら2人から、実際にてらこやで活動していく中で思うことをお話させていただきます。

その前に、てらこやでどのようなことをやっているのか、学生が作った動画がありますのでご覧いただこうと思っています。

(動画上映) (ナレーションなどを文字化)

皆さん、こんにちは。地域教材開発研究室です。今回は研究室活動のひとつである『てらこや』について紹介していきます。

てらこやは平成31年5月から始まり、旧明照幼稚園で地域の方々が主体になって行っている活動です。毎週土曜日の12時30分から行っており、幼稚園児・小学生・中学生と幅広い子どもたちが来ています。子どもたちとボール遊びや鬼ごっこ、外でサッカーや野球を行っています。夏には一緒に海へ行ったり、冬にはソリ滑りや雪だるま作りなど、外でも中でも子どもたちと一緒に遊んだりしています。

てらこやでは一年生企画が行われたり、最近では外でお昼ご飯を一緒に作ったりと、活動内容がとても充実しております。

学生「てらこやの楽しいところを教えてください」

子 「やっぱりてらこやの先生が多い時と少ない時があるんですけど、やっぱり友達と先生と鬼ごっこをするのが一番楽しいです」

学生「てらこやに来て、良かったなと思うときはどんなときですか」

子 「やっぱりてらこやの先生とかと遊ぶときかな。  
(楽しい?) 楽しい」

学生「楽しいイベントとか、ありますか」

子 「ハロウィンとか、オバケ屋敷とか、いろんなことをやったりするのが一番大好きだね、てらこやで」

学生「大学生と関わってみての、感想を教えてください」

子 「他の人たちとかを見ていたら、結構ガチガチで、

なんか改まった感じだったのですけれど、(てらこやの)大学生とだったらいい意味で、ふわふわした感じで、ちゃんと自分たちの意見言えたんじゃないかなって思います」

子 「大学生が思っていたより楽しそうで、本当に中学生ってみたいって言ったら失礼なんんですけど、中学生みたいに話し合って楽しく企画したりしていたのでちょっと驚きました」

学生「お兄さん、お姉さんのこと好きですか」

子 「うん。(なんで好き?)一緒に遊んでくれるから。」  
(動画 終わり)

### 大学生 池田様の発表

ここからは僕たち2人がお話しさせていただきます。時間が迫っているので手短にお話をさせていただきます。

僕からは、実際にてらこやで活動をしてみて、すごく自分の中で学びになることをお話しさせていただきます。

その学びとしては、実際、活動中に児童を対応する中で困ったことだったり、逆にこういう時はどうしたらいいのだろうということを、てらこやが終わった後の反省会で、すぐ同期とか先輩後輩とか、小林先生、藤井住職だったり、様々な方に共有して、事例対応というのですか、この人だったらこうする、僕だったら・私だったらこうするよというのをすぐに共有できるところかなと思っております。

こういうのは、自分一人の視点だけではなくて、様々な人の視点を取り入れられるすごくいい機会になっているので、このミーティングで話し合った内容が将来、教員になった時に児童を対応するうえですごく学びになるものだと僕自身は思っています。

### 大学生 田名部様の発表

私は、てらこやという場所を開いてくださっている藤井さんに思うのですが、てらこやという場所は子どもの「したい」とか「学びたい」という意欲を存分に引き出してくれる場所だと私は思っています。

「これをしたい」という子どもに対して、じゃあ、大学生はどうするかという対応を私たちが一生懸命に一緒に考えたり、遊んだりというのも、大学生はみんなで、子ども主体なのですから大学生が子どもに合わせて一緒に楽しむというのが大事だなと思っています。

一緒に楽しみながら、子どもの学ぶ力とか好奇心を引き出すような遊びとか企画をこれからもてらこやで考えていくたいと思っています。



### 本日のニコニコ献金

- 中島 政徳君 新聞に載ってしまいました。
- 藤井 敬亮君 本日 釧路新聞の社協の講演が掲載されました。本日の講師例会もよろしくお願ひします
- 吉田 潤司君 なんとなく

今年度累計 132,000 円